

〈原著論文〉

ダンスに対する抵抗感：

恥ずかしさと苦手意識の生起理由

酒井 美鳥 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

清河 幸子 (東京大学大学院教育学研究科)

溝川 藍 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

Hesitancy toward dance:**Reasons for embarrassment and perceptions of inability**

Midori SAKAI (Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University)

Sachiko KIYOKAWA (Graduate School of Education, The University of Tokyo)

Ai MIZOKAWA (Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University)

Abstract

Dance classes are a part of the current Japanese educational system. It has been reported that some students exhibit hesitancy toward dance. However, it is unclear why such hesitancy occurs. This study aimed to identify the factors contributing to students' embarrassment and perceptions of inability, which are subcomponents of hesitancy toward dance. A total of 58 undergraduate students ($M_{age} = 19.91$, $SD = 1.26$; 18 men and 40 women) were surveyed. Two open-ended questions were asked regarding their embarrassment and perceptions of their inability to dance. Based on previous studies, responses were classified into three categories for embarrassment to dance (social evaluation concerns, low self-evaluation, and self-image discrepancy) and four categories for their perceived inability to dance (skillfulness, presence of others, lack of experience/knowledge, and expressing oneself). These findings can aid in reducing hesitancy toward dance.

Keywords: dance education, embarrassment, perceptions of inability, hesitancy, qualitative analysis

I 問題と目的

現代の日本の子どもは、誰もが学校教育の中でダンスを経験する。小学校の体育においては、旧学習指導要領以前からダンスにかかわる領域は必修とされており（文部科学省, 2017a）、中学校の保健体育においては、2012年度からダンスの領域が必修化されている（文部科学省, 2017b）。高等学校の保健体育においても、ダンスの領域を選択して履修することができる。また、運動会や体育祭などの授業以外でダンスの発表が行われることもある。

このように誰もが学校教育を通してダンスを経験する中で、ダンスの授業に対して抵抗感を感じている学習者の存在も報告されている。例えば、國本（2016）が行った、中学校・高等学校の時にダンスの授業を受けた経験がある大学生を対象に行われた調査では、「ダンスの授業を受けるにあたり抵抗感はありましたか」という質問に対し、55名のうち53%が「強く思う」または「思う」と回答している。「抵抗感」とはそ

のまま素直に受け入れるには、少し躊躇するようなしっくりしない感じであり、ダンスへの抵抗感はダンスの授業への積極的参加を妨げることが予想される。したがって、ダンスへの抵抗感を軽減する方策の検討が望まれるが、そのためにはまず、抵抗感が生じる理由を明らかにする必要がある。

ダンスへの抵抗感が生じる理由として、國本（2016）は「未経験者ではできない」、「他者に見られることが恥ずかしい」、「自己表現することが恥ずかしい」、「取り組み方が分からない」の4項目を挙げている。この4項目は、「他者に見られることが恥ずかしい」、「自己表現することが恥ずかしい」という恥ずかしさに関する2項目と、「未経験者ではできない」、「取り組み方が分からない」という、ダンスをすることそのものに対する懸念であり、苦手意識として捉えることができる2項目に区別することができる。恥ずかしさとは、「無意図的な、あるいは自らの望まない苦境や逸脱を意識した際の情緒反応」（樋口、2001）であり、苦手意識とは、ダンスに取り組むこと自体に対する懸念や不安である。ダンスに対する恥ずかしさに関する研究は少なく（大西、2020）、ダンスに対する苦手意識に関する研究は、著者の知る限り、行われていない。ダンスへの抵抗感を明らかにするうえでは、ダンスに取り組む際に感じられる恥ずかしさと苦手意識がなぜ生じるのか、その具体的理由を明らかにする必要がある。

ダンスに対する恥ずかしさが生じる理由については、酒向ほか（2014）が検討している。酒向ほか（2014）は、ダンスに恥ずかしさを感じる内容について、ダンスの授業を実施する立場である中学校女性体育教師36名を対象に調査を行っている。調査項目は、「人に見られることに緊張を感じる」、「人に見られることに照れを感じる」、「自分自身に戸惑いを感じる」、「人と踊るときにどのようにふるまってよいか困惑する」の4項目であった。少数の項目での調査は同意の程度や回答の割合を明らかにするうえで有用であるが、このように調査者が任意に設定した項目を用いた場合、調査者が想定していない恥ずかしさが生じる理由を見落としてしまう可能性がある。その点を克服した方法として、内山ほか（2013）は、中学生150名を対象にダンスの授業を行い、その授業において恥ずかしさを感じる具体的な場面について、「どんな時に恥ずかしいと感じましたか」という質問によって調査を行い、自由記述回答から、ダンス場面に特化した恥ずかしさを感じる場面を明らかにすることに成功している。しかしながら、内山ほか（2013）は特定の授業内での経験を調査したものであり、かつ、恥ずかしさを感じた場面についての調査であって恥ずかしさを感じる理由とは異なるため、恥ずかしさが生じる理由の解明は課題として残されている。また、苦手意識が生じる理由については、著者の知る限り、研究が行われていない。

以上から、本研究ではダンスへの抵抗感が生じる理由について、恥ずかしさと苦手意識に焦点を当ててその生起理由を明らかにすることを目的とする。恥ずかしさと苦手意識それぞれについて自由記述式の設問を用いて回答を収集することでダンス場面に特化した生起理由を検討する。本研究のデータ収集方法として自由記述式の調査を採用したのは、抵抗感が生起する理由は人によって異なることから、多様な理由を抽出するためには研究者側があらかじめ設問を設定せずに、より多くの回答者からデータを収集することが必要であると考えたためである。インタビューと比較して、この方法は実施が簡便であることから、より多くのデータの収集が可能となる。その一方で、情報量が低下することは否めないが、本研究の目的に照らして十分な情報が得られると判断した。なお、言語データを一つ一つ解釈して扱っていく作業となるため、現実的に処理できる範囲でサンプルサイズを設定する。得られた自由記述回答は、恥ずかしさと苦手意識が生じる理由に関する先行研究の枠組みを参考に分類し、それと異なるカテゴリが見られるかを検討、また、ボトムアップ的に回答を分類し、ダンス場面に特化したレベルで下位カテゴリを作成する。

恥ずかしさの分類には、恥ずかしさの発生源について先行研究のモデルを整理、再構成した樋口（2001）のカテゴリを用いる。樋口（2001）は恥の発生源を「社会的評価懸念」、「自尊心低減」、「自己イメージ不一致」、「相互作用混乱」の4つに整理している。「社会的評価懸念」とは他者からの評価に対する懸念によって発生する恥、「自尊心低減」とは自身の価値の低さを感じることによって発生する恥、「自己イメージ不

致」とは自らまたは他者がもつ自己イメージからの逸脱によって発生する恥、「相互作用混乱」とは社会的場面において個人がとるべき役割を見失い、対人相互作用が混乱・停滞することによって発生する恥である。ダンス場面において恥ずかしさが生じる理由の分析には、この4つのカテゴリを用いる。

苦手意識の分類には、美術の授業に対する苦手意識を軽減させるための要素を提案した降旗（2016）のカテゴリを修正したものを用いる。領域を問わない苦手意識の発生源についての心理学的研究は著者の知る限り見当たらないものの、降旗（2016）は大学生を対象に、図画工作・美術に対する苦手意識が減少した理由についての自由記述回答をもとに、苦手意識を減少させるための5つの要素を挙げている。降旗（2016）が提案した要素は苦手意識を減少させるための要素であるが、そこには、発生源が間接的に関連していると考えられる。苦手意識が減少した理由を逆方向に考えると、その理由の存在は苦手意識を増加させる可能性がある。例えば、「上手であることよりも自分らしさを意識できるようになった」といった苦手意識が減少した理由からは、上手であることへの意識が苦手意識を形成していたと考えることができる。降旗（2016）が挙げた5つの要素とは、「上手・下手の呪縛から解放させること」、「うまさより自分らしさの表現を目指すこと」、「自分らしさの表現を可能にする用具の知識・技能」、「表現本来の楽しさを味わわせること」、「自分らしい表現が認められる学習空間を」であった。本研究では分類の基準として使用するため、これら5つの要素について、「上手さ」、「自分らしさ」といった言葉の重複を整理し、苦手意識の理由を指す言葉に修正した。その結果、「上手い下手」、「学習空間」、「経験・知識不足」、「表現すること」の4つのカテゴリが作成された。ダンス場面において苦手意識が生じる理由の分析には、この4つのカテゴリを用いる。

II 方法

1. 調査時期 2020年10月から11月に実施した。
2. 参加者 2012年度の中学校におけるダンス教育必修化以降の世代にあたる、22歳以下の名古屋大学の学生58名 ($Mage=19.91$, $SD=1.26$, 男性18名, 女性40名) が研究に参加した。参加者は名古屋大学の研究参加登録システムを通じて募集した。募集の際、本研究は踊ることに対して抵抗感を持っている人を対象としている旨を明記した。参加者はコンビニの商品引換券（コーヒーまたはスイーツ）、もしくは、授業時間外の学習活動に対して発行されるポイントであるコースクレジット0.5のどれか一つを受領した。
3. 手続き 調査にはオンライン調査作成・実施システムであるQualtricsで作成されたアンケートを使用した。参加者は、研究参加登録システム内から所定のURLにアクセスし、オンライン上で設問に回答した。はじめに研究に関する説明を読み、参加に同意をした者のみが調査画面に進んだ。調査においては、参加者は、まず「踊ることに対して抵抗感がありますか」という質問に対し、「はい」か「いいえ」のどちらかを回答した。次に、苦手意識（「踊ることに対して苦手意識がありますか」）について、「はい」か「いいえ」のどちらかを回答した。続いて、「その理由をできるだけ詳しく教えてください（自由記述）」と表示され、自由記述で回答した。次に、恥ずかしさ（「踊ることに対して恥ずかしさがありますか」）について、苦手意識と同様に有無と理由を回答した。さらに、ダンス経験、性別、年齢を回答した。
4. 倫理的配慮 本研究は第一著者の所属機関に設置されている研究倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号：20-1507）。
5. 分析方法

分析は以下のステップで行った。①一人の回答者が記述内で複数の理由を挙げている場合、それを分割した。第一著者と第二著者がこの分割作業を独立に実施し、分割の位置が異なった箇所については協議をして決定した。②恥ずかしさの理由の分類は樋口（2001）を参考に、苦手意識の理由の分類は降旗（2016）を

参考に、第一著者と第二著者が協議しながら、①で分割した回答を、作成したカテゴリに分類した。カテゴリにあてはまらない回答は「その他」に分類した。③第一著者と第二著者が、カテゴリ内の回答を、似た内容にまとめて、下位カテゴリを作成した。④著者ではない、心理学を専門としている大学院生2名が回答をカテゴリと下位カテゴリに分類する作業を著者とは独立して実施した。大学院生は、恥ずかしさの理由または苦手意識の理由のどちらかを、それぞれが担当した。③で分類されたものと異なる分類がされた回答については、大学院生と第一著者が協議を行い、下位カテゴリと回答の分類を修正した。⑤④の結果を受けて、第一著者と第二著者で下位カテゴリと回答の分類について再検討し、分類を修正した。この時点で、下位カテゴリを確定した。⑥分類の信頼性を検討するために、いずれの分類も行っていない、心理学を専門としている大学院生1名が恥ずかしさの理由と苦手意識の理由両方について、回答をカテゴリと下位カテゴリに分類する作業を行った。⑤の分類との中の κ 係数を算出したところ、恥ずかしさの理由は.82、苦手意識の理由は.88であった。十分な信頼性があると判断し、⑥の分類結果を採用した。

Ⅲ結果

踊ることに対して恥ずかしさも苦手意識もないと回答した参加者5名と、自由記述部分が未回答であった参加者1名を除く、52名 ($Mage=19.96$, $SD=1.22$, 男性16名, 女性36名) から得られた回答を分析対象とした。このうち、恥ずかしさがあると回答した参加者は50名、苦手意識があると回答した参加者は46名、恥ずかしさはあるが苦手意識はないと回答した参加者が6名、苦手意識はあるが恥ずかしさはないと回答した参加者が2名であった。

「経験なし」と回答した1名の回答を除く51名のダンス経験に関する回答を、「学校教育」、「個人・継続的活動」、「個人・一時的活動」のそれぞれについて記述があるかどうかという観点から分類した。学校教育には、学校主導で行われた活動の経験を分類した。例えば、授業、運動会等の行事でのダンス演技、野外活動でのレクリエーション等の回答が含まれる。個人・継続的活動には、ダンスに関連する団体に所属していた経験を分類した。例えば、習い事、部活、サークル活動が含まれる。個人・一時的活動には、個人的に、またはダンスに関連のない団体での一時的なダンス経験を分類した。例えば、友人との遊び、コンサートライブでのダンス、吹奏楽部の演奏会でのパフォーマンス等が含まれる。3種類すべての経験がある回答者は1名、学校教育のみの経験者は32名、個人・継続的活動のみの経験者は3名、個人・一時的活動のみの経験者は1名、学校教育と個人・継続的活動の経験者は4名、学校教育と個人・一時的活動の経験者は10名、個人・継続的活動と個人・一時的活動の経験者は0名であった。

1. 恥ずかしさの理由

表1に、恥ずかしさの理由のカテゴリと下位カテゴリ、分類された回答数と回答例を、カテゴリ順、回答数が多い順に示した。以下ではカテゴリごとに結果を説明する。下位カテゴリが作成されたものについては、分類の観点を示した。

社会的評価懸念には、「他者からの評価に対する懸念」に関わる回答が分類された。それらの回答は、さらに、何に対する評価懸念かという観点から、下位カテゴリに分類された。その結果、自分のダンスの出来に対する評価懸念である「他者に評価されること」と、ダンスをしていない状態でも自分の姿を他者に見られることに対する懸念である「注目を浴びること」の下位カテゴリに分類された。

自己評価の低さには、「自らの価値をネガティブに感じること」に関わる回答が分類された。樋口(2001)では自身の全体的な価値を低く評価するような項目内容で調査が行われていたが、本研究はダンス

場面に特化した調査であったことから、ダンスをすることについての自身の評価という観点で、「ダンスが上手くできない」という自己評価は、自らの価値をネガティブに感じることでありと解釈し、分類を行った。分類基準は、ダンスが上手くできないことについて書かれている回答であり、他者に見られることについて書かれていない回答とした。全ての回答は、ダンスが上手くできないという自分に対する評価であったことから、自己評価の低さカテゴリには下位カテゴリは作成されなかった。カテゴリ名について、分析の段階で「自尊心低減」としていたものを、「自己評価の低さ」に改めた。「自尊心低減」は自分という個人全体に対してネガティブに感じることを意味するのに対し、本研究で示された回答はダンス場面に限定された恥ずかしさの理由であったため、「自尊心低減」というカテゴリ名は適当でないと判断した。「自己評価の低さ」に分類された回答には、ダンスが上手くできないことについて書かれおり、実力不足により上手く踊れない自分を認識することで恥ずかしさを感じる、という意味内容を示す。

表1 恥ずかしさの理由のカテゴリ名と回答数, 回答例

【カテゴリ】 下位カテゴリ	回答数	回答例
【社会的評価懸念】		
他者に評価されること	25	・ダンスの授業で他の生徒から自分の踊りを揶揄された経験があるため。 ・人に変な動きしてると思われたら嫌だから。
注目を浴びること	4	・他者に見られるのが嫌だから。 ・注視されてるきがして、落ち着かない。
【自己評価の低さ】	24	・上手に踊れないから ・自分のダンスのキレが悪い
【自己イメージ不一致】		
他者がもつ自己イメージ	4	・見ている人が、普段の自分と思っている時の自分のギャップを感じていると思うと恥ずかしくなるから。 ・特に全力でやると馬鹿にされるのではないかと不安がある
自らがもつ自己イメージ	4	・自分に自信を持って堂々と踊ることに抵抗感があるから。 ・表現するのに抵抗があるから
【相互作用混乱】	0	
その他	2	・2人以上、集団で踊る時は恥ずかしさはないのですが、1人だと恥ずかしさがあるかもしれないです。
合計	63	

自己イメージ不一致には、「他者または自らが持っている自らのイメージとの不一致」に関わる回答が分類された。それらの回答はさらに、「誰がもつ自己イメージとの不一致か」という観点から、下位カテゴリに分類された。その結果、他者が持つ自己イメージとの不一致である「他者がもつ自己イメージ」と、自らがもつ自己イメージとの不一致である「自らがもつ自己イメージ」に分類された。

相互作用混乱は「他者に対する適切な振る舞いが分からないこと」と定義したが、本研究ではこのカテゴリに該当する回答は無かった。

その他には上記のカテゴリにあてはまらないものまたは記述が曖昧で判断がつかないものが分類された。このカテゴリに分類された回答は2個で、「2人以上、集団で踊る時は恥ずかしくはないのですが、1人だと恥ずかしさがあるかもしれないです」、「今まで踊った経験が少ないから」であった。両者とも、恥ずかしさを感じる理由が曖昧であったため、このカテゴリに分類された。したがって、独自のカテゴリを成立するには至らなかった。

2. 苦手意識の理由

表2に、苦手意識の理由のカテゴリと下位カテゴリ、分類された回答数と回答例をカテゴリ順、回答数が多い順に示した。以下ではカテゴリごとに結果を説明する。下位カテゴリが作成されたものについては、分類の観点を示した。

表2 苦手意識の理由のカテゴリ名と回答数、回答例

『カテゴリ』 下位カテゴリ	回答数	回答例
『上手い下手の意識』		
動き	19	・不格好な振りになっている気がするから。 ・キレのある動きができない
リズム感	7	・リズム感という概念すらわからない。動きを覚えても音楽に合わせられない。 ・リズム感があまりなく、全員と同じような動きができていないか不安になるため。
合わせること	2	・動作を合わせるのが難しい。 ・周囲と綺麗に合わせることに自信がなく、どちらかという苦手だと感じる。
覚えること	2	・動作の習得が平均より遅くて嫌な気分になるから。 ・覚えるのが苦手で、途中で踊りを忘れてしまいそうだから
特定不能	2	・得意でないから ・上手く見えないから。
『他者の存在』		
他者に評価されること	10	・小さな頃に周りの人たちに「下手だ」「力加減ができていない」「ロボットみたいだ」と言われたから。 ・自分だけ動きがおかしいと思われるのではないかと不安になるから
他者と比較して不安になる	4	・自分が他者と比べて踊りの技術が劣っているのではないかと不安になるため ・高校時代の部活(吹奏楽部)で周りにダンスが得意な子やこだわりの強い子が多かったため比較して自分は苦手だと感じている。
注目されること	3	・人に見られるのが嫌 ・他の人に見られたくない
協調しなければいけないこと	2	・中高のダンスの授業では、チームに分かれて練習、発表を行う形式がとられていたのだが、「動きを間違えたら自分一人が目立ってしまう上、周りに迷惑をかけてしまう」というプレッシャーが苦手だった。 ・何より、協調を強いられるのが嫌だった。
『経験・知識不足』		
経験不足	8	・ダンス系のサークルや習い事をしていないから ・今まで経験したことのない動きがあり難しい
知識不足	2	・どう踊ればいいのかわからない ・やり方や正解がわからないから
『表現をすること』	3	・何かを表現することに難しさを感じるから ・表現するのが苦手だから
その他	1	・スタイルに自信がないから
合計	65	

上手い下手の意識には、「上手い、下手の意識に由来する苦手意識」に関わる回答が分類された。それらの回答はさらに、「何が上手くできないと感じているのか」という観点から、「動き」、「リズム感」、「合わせること」、「覚えること」、「特定不能」の下位カテゴリが作成された。カテゴリ名について、分析の段階では

「上手い下手」という言葉を用いていたが、「上手い下手」自体ではなく、そこに意識を向けることによって苦手意識が生じているということが明確になるように「の意識」を追加し、「上手い下手の意識」にカテゴリ名を改めた。

他者の存在には、「学習空間に由来する苦手意識」に関わる回答が分類された。それらの回答はさらに、「学習空間で起こる何に苦手意識を感じるのか」という観点から、「他者に評価されること」、「他者と比較して不安になる」、「注目されること」、「協調しなければいけないこと」の下位カテゴリが作成された。カテゴリ名について、分析の段階では「学習空間」という言葉を用いていたが、「他者の存在」にカテゴリ名を改めた。本研究では学習場面に限定せず、ダンス場面全体を想定して回答を収集したため、「学習空間」という限定された実施場面が想定されるカテゴリ名は適当でないと判断した。また、このカテゴリに分類された回答はすべて同じ空間にいる他者の存在に関するものであったため、「他者の存在」とカテゴリを命名した。

経験・知識不足には、「経験・知識がないことに由来する苦手意識」に関わる回答が分類された。それらの回答はさらに、「不足しているものが何か」という観点から、「経験不足」、「知識不足」の下位カテゴリが作成された。

表現をすることには「表現をすることに由来する苦手意識」に関わる回答が分類された。このカテゴリに分類された3つの回答には、何を表現することに苦手意識を感じているのかについては書かれておらず、下位カテゴリは作成されなかった。

その他には上記のカテゴリにあてはまらないものが分類された。このカテゴリに分類された回答は1個で、「スタイルに自信がないから」であった。これは、自身の容姿に対する自信のなさについて述べられたものと解釈できるが、容姿に自信がないことでなぜダンスの苦手意識につながるのか（例えば、動きが不格好に見えてしまうから、注目されることが嫌だから）については多様な解釈が可能であるため、上記のカテゴリにあてはまらないものとした。

IV 考察

本研究の目的は、ダンスへの抵抗感が生じる理由として、恥ずかしさと苦手意識に着目して具体的な生起理由を明らかにすることであった。そのため、それぞれが生じる理由について、ダンスに対して抵抗感を持っている者を対象に自由記述式の設問を用いて調査を行った。得られた自由記述の回答は、先行研究のカテゴリを参考に分類し、下位カテゴリを作成した。恥ずかしさの理由の分析には恥の発生源を分類した樋口(2001)を、苦手意識の理由の分析には図画工作・美術の授業に対する苦手意識を検討した降旗(2016)を援用したところ、ダンスに対する抵抗感は恥ずかしさの理由、苦手意識の理由共に、先行研究から想定されたカテゴリに収まることが確認された。そのうえで、本研究では新たに下位カテゴリを作成することで、ダンス場面に特化した、抵抗感を感じる具体的な理由が明らかとなった。以下では、恥ずかしさの理由、苦手意識の理由それぞれについての考察と、カテゴリ間の関連性についての考察を行い、最後に、今後の展望について述べる。

1. 恥ずかしさの理由

はじめに、恥ずかしさのカテゴリまたは下位カテゴリごとに、それらが生じる背景について考察する。まず、本研究では社会的評価懸念の下位カテゴリとして、他者に評価されることと、注目を浴びることの2つが示された。この結果からは、他者に評価的に見られることに対する抵抗感と、他者から視線が向けられることそのものに対する抵抗感は区別して捉え得ることが示唆される。他者に評価されることに対して恥ず

かしさが生じる背景には、ダンスの見方や評価基準として、ダンスの出来が重要であるという考えが存在している可能性が考えられる。すなわち、他者のダンスを見る際にも、自分自身が踊る際にも、上手く踊ることが重要であると考えていることから、他者からの評価に対する懸念が生まれるのではないだろうか。注目を浴びることについては、ダンスの場で他者に自分の姿を見られたくないと思う気持ちから、場を共有する他者との消極的な人間関係が垣間見える。このことは、ダンスの場を構成する他者との人間関係が、恥ずかしさの生起に影響する可能性を示唆している。

自己評価の低さのカテゴリの背景には、他者に評価されることの背景と同様に、ダンスの出来が重要な基準であるという認識がうかがえる。上手く踊ることができると自信が持てる場合にはこうした恥ずかしさは生まれにくいと考えられる一方で、ダンスはその出来を重視しなくてもよい場合も多い。例えばフォークダンスは、上手に踊ることよりも踊りを通して仲間と交流することに重点がある。したがって、恥ずかしさの軽減のためには、ダンスの出来を重視する場合もあれば、そうではないダンスの楽しみ方もあることについて、経験的に学べる環境が望ましいのではないかと考えられる。

自己イメージ不一致の下位カテゴリとして、他者がもつ自己イメージと自らがもつ自己イメージの2つが示された。これらは、「踊ることは他者からみて、または自分からみて自分らしくないこと」という認識が恥ずかしさを生起させる理由となっていることを意味している。この背景には、ダンスに対する偏ったイメージが影響している可能性がある。ダンスのイメージについてはこれまでも調査が行われているものの(猪崎ほか, 2013; 中村ほか, 2020; 朴ほか, 2017等)、自己イメージとの関連については検討されておらず、今後の課題である。

相互作用混乱のカテゴリについては、本研究では該当する回答はみられなかった。酒向ほか(2014)では「人と踊るときにどのようにふるまってよいか困惑する」という相互作用混乱に該当する項目がダンスに恥ずかしさを感じる内容として調査されていたが、この項目の選択割合は5%と低いものであった。本研究と酒向ほか(2014)では調査対象者や回答方式が異なっているため、ダンスに対する恥ずかしさとして相互作用混乱がどの程度、どのような場面で、どういった理由で存在しているかを確認することも、今後の検討課題である。

2. 苦手意識の理由

次に、苦手意識のカテゴリまたは下位カテゴリごとに、それらが生じる背景について考察する。上手い下手の意識のカテゴリには、5つの下位カテゴリが示された。5つの下位カテゴリを概観すると、ダンスの特徴を示すものとしてみることができる。つまり、日常生活とは異なる動きをすること、リズムカルに動くこと、他者と動きを合わせること、動きのつながりを覚えることは、ダンスの特徴であり難しさであることを示している。これらは、ダンス場面において、学習者がどのような点に難しさを感じるのかを示す具体的な内容となっており、苦手意識を軽減する方法を検討するうえでの観点として役立つ可能性がある。

他者の存在のカテゴリには、4つの下位カテゴリが示された。他者に評価されることと、注目されることは、恥ずかしさの生起理由としても挙げられたカテゴリと共通する内容である。他者と比較して不安になること、協調しなければいけないことについては、苦手意識独自の内容である。他者と比較して不安になることについては、他者が自分よりも上手く踊れているという認識、自己評価の低さ、他者と同じレベルにいないといけないという考えから生起するものではないだろうか。ダンスは多くの場合、他者と同じ動きを同時に行うため、他者との比較が起りやすいことも、他者と比較して不安になるという苦手意識が生じる背景にある可能性がある。協調しなければいけないことについては、少人数でのグループ活動の経験からの苦手意識であることが推察される。特に、回答例にみられるように協調することがプレッシャーになってしまう可能性については、ダンスの出来が重要な基準となっていることも背景として考えられる。

経験・知識不足のカテゴリからは、「経験、知識がないとダンスはできない」という、ダンスに対する高いハードルの認識がうかがえる。近年、ダンスは習い事やエンターテインメントとしても人気が高い。幼少期から経験・知識を豊富に持つ他者の存在が身近にあることや、日々メディアを通じて完成されたダンス作品を目にする機会が多いことも、ダンスに対してハードルを感じる背景としてあるかもしれない。

表現をすることのカテゴリからは、イメージ等を動きに表すことに対しての苦手意識が示されている。表現には正解はなく、自由であってよいという前提がある一方で、それを他者に見せる際には、どう伝わるかを意識しなければならないという葛藤がある。ダンスにおける表現の問題については、出口 (1992) が芸術として求められる表現と、自身が感じたことを表す表現について区別するべきであることを指摘している。つまり、表現技術 (どのように) と表現内容 (なにを) を区別して実践を行っていくことでこうした苦手意識が生じにくくなる可能性が予想される。

3. カテゴリ間の関連

抵抗感が生じる理由である恥ずかしさと苦手意識の具体的理由は独立したものではなく、関連している可能性が示唆される。2つの要素を概観すると、共通点もみられた。カテゴリ名としてほぼ共通しているものとして、恥ずかしさの下位カテゴリにある「他者に評価されること」と「注目を浴びること」は、苦手意識の下位カテゴリにある「他者に評価されること」と「注目されること」と同内容といえる。カテゴリ名は異なるものの回答例を見ると同内容となっているのは、恥ずかしさの「自己評価の低さ」と苦手意識の「上手い下手の意識」であり、共にダンスが上手くできないことについての回答であった。

加えて、恥ずかしさと苦手意識それぞれにおけるカテゴリ同士も関連している可能性が示唆される。恥ずかしさの発生因間の関連を検討した樋口 (2002) では、「自己イメージ不一致」は「社会的評価懸念」に影響し、「社会的評価懸念」は「相互作用混乱」に影響し、「相互作用混乱」は「自尊心低減」に影響することが明らかとなっており、因果関係が示唆されている。なお、樋口 (2002) では公恥状況と私恥状況という状況別に関連が検討されており、公恥状況においては上記の関連に加えて「社会的評価懸念」が「自尊心低減」に影響し、私恥状況においては上記の関連に加えて「自己イメージ不一致」が「自尊心低減」に影響しているという結果が示されている。樋口 (2002) で示されたカテゴリ間の関連を、公恥状況を参考にダンス場面に適用してみると、ダンスという自分らしくないことをしている (自己イメージ不一致) 姿は、他者からどう見られているのかという意識 (社会的評価懸念) を高め、上手く踊れていない部分に意識が向きやすくなる (自己評価の低さ) といった関連が考えられる。本研究のデータ数は有意性検定を行うには十分でないため、樋口 (2002) と同様の関連が見いだされるかは課題として残されるものの、今後の研究ではカテゴリ間の関係性を考慮して検討する必要性が示唆される。

4. 今後の展望

本研究ではこれまで明らかにならなかったダンスに対する抵抗感の理由について、恥ずかしさと苦手意識に着目して自由記述方式にて調査し、分類を行った。その結果、恥ずかしさの理由、苦手意識の理由共に、先行研究から想定されたカテゴリに収まることが確認された。そのうえで、新たに下位カテゴリを作成することで、ダンス場面に特化した、恥ずかしさと苦手意識を感じる具体的な理由が明らかとなった。以下では、本研究の知見をダンス教育の実践に活かしていく上での展望を3点示す。

第一に、生じる抵抗感の内容と、ダンスの種類との関連を検討することである。本研究で得られた恥ずかしさと苦手意識の生起理由のカテゴリを用いて、新たに対象者を拡大してデータを収集し、同時にダンスの経験種類との関連を明らかにすることや、特定のダンスの状況や内容を回答者に想起させたうえで、本研究で得られた恥ずかしさと苦手意識の生起理由のカテゴリに対してどの程度あてはまるかといった調査が考

えられる。特に、学習指導要領（文部科学省，2017a；2017b）に示されている3つの内容（「創作ダンス」、「フォークダンス」、「現代的なリズムのダンス」）について、本研究で得られた抵抗感のカテゴリとの関連を明らかにすることで、ダンスの種類ごとにどのような抵抗感もたれやすいのかが明らかとなり、対策がとりやすくなることが考えられる。本研究ではダンスの内容は限定せずに調査を行ったが、回答者のダンス経験の種類と結果のカテゴリの関連について、学校教育のみと回答した32名と、学校教育以外にも経験がある回答者19名の結果カテゴリを比較したところ、恥ずかしさが生じる理由には大きな差はみられなかった。一方で苦手意識が生じる理由については、「協調しなければならないこと」は学校教育のみの経験者だけが回答しており、「知識不足」は学校教育以外にも経験がある回答者のみが回答していた。しかしながら、両者は回答数が少なく、経験によって生じる苦手意識に違いがあると結論づけるには注意が必要であるため、今後の知見の積み重ねが期待される。

第二に、恥ずかしさと苦手意識の要素間、また、それぞれの要素内のカテゴリ間の関係性を検討することである。本研究は抵抗感の理由としてどのようなものがあるかを明らかにすることが主眼であったが、それぞれの要素、カテゴリは影響し合っている可能性が考えられる。これらの関係性を検証し、より根源的な理由が明らかとなれば、ダンスに対する抵抗感の予防・軽減策を検討しやすくなると考えられる。そのためには、本研究で得られたカテゴリをもとに質問項目を作成し、対象者数を増やして調査を行うことが必要となる。

第三に、ダンスの授業実践に応用することである。これまでもダンスに対する抵抗感を軽減するための授業方法は提案されているものの（古木ほか，2009；畑野ほか，2016；森川，2015；島田，2012）、学習者が何に対して抵抗感を感じているのかは明らかにされないまま検討が行われてきた。本研究の調査内容はダンスの授業に限定しておらず、ダンス一般についての回答であるものの、学習者が感じる抵抗感の理由が明らかとなった。今後は、本研究で示された抵抗感の具体的な理由を参考に、予防・軽減が期待される授業方法を考案・検証することが可能である。また、授業前に学習者に対してダンスに対する抵抗感の度合いについて本研究のカテゴリを参考に調査を行うことで、学習者の回答傾向に合わせて授業内容を工夫することも可能だろう。

文献

- 1) 出口敦美，1992「芸術における「表現」概念の一考察—「表現」概念の多義性と表現主義—」，『岩手大学教育学部研究年報』，51(2): 1-17.
- 2) 降旗孝，2016「図画工作・美術への〔苦手意識〕の実態と解消のための要素—目指すべき造形美術教育の教育コンテンツ開発に向けて—」，『美術教育学研究』，48: 369-376.
- 3) 古木竜太・佐藤みどり，2009「保育者養成課程における身体的表現活動に関する学習内容の検討（2）—学生の内省記録に着目した事例—」，『国際学院埼玉短期大学研究紀要』，30: 27-37.
- 4) 畑野裕子・久山素子，2016「「恥ずかしさ」の軽減を目的とした「表現運動」の授業の試み」，『神戸親和女子大学児童教育学研究』，35: 67-81.
- 5) 樋口匡貴，2001「公恥系状況および私恥系状況における恥の発生メカニズム—恥を構成する情緒群とその原因要素からのアプローチ—」，『感情心理学研究』，7(2): 61-73.
- 6) 樋口匡貴，2002「公恥状況および私恥状況における恥の発生メカニズム—恥の下位情緒別の発生プロセスの検討—」，『感情心理学研究』，9(2): 112-120.
- 7) 猪崎弥生・酒向治子・永田麻里子・田中俊之・米谷淳，2013「中学生のダンス・イメージ、ダンスに対する態度、ダンス授業の評価：質問紙調査を基に」，『お茶の水女子大学 人文科学研究』，9: 15-24.

- 8) 國本眞由子, 2016「現行の学習指導要領以前のダンス授業を受けた生徒の現状調査」, 『法政大学多摩論集』, 32: 97-112.
- 9) 文部科学省, 2017a「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)」, https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf, (参照日 2023 年 12 月 20 日).
- 10) 文部科学省, 2017b「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示)」, https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf, (参照日 2023 年 12 月 20 日).
- 11) 森川みえこ, 2015「創作ダンス授業における「恥ずかしさ」の軽減に関する研究—挙手の運動に着目して—」, 『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』, 12: 107-114.
- 12) 中村恭子・武井正子, 2000「ダンスの学習過程におけるダンスイメージの変容に関する研究—体育系学生を対象として—」, 『比較舞踊研究』, 6(1): 25-34.
- 13) 大西祐司, 2020「ダンス授業における「恥ずかしさ」の要因と実態」, 『体育科教育学研究』, 36(1): 67.
- 14) 朴京眞・平山素子・寺山由美・囃子美和・米澤麻佑子, 2017「ダンスの授業を選択した大学生のもつダンスのイメージのテキストマイニング分析: 大学体育におけるダンス授業のあり方の検討」, 『大学体育研究』, 39: 29-44.
- 15) 酒向治子・永田麻里子・猪崎弥生, 2014「中学校女性体育教員のダンスに対する抵抗感と羞恥心について」, 『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』, 155: 109-113.
- 16) 島田左一郎, 2012「学習者の羞恥心を軽減する“リズムダンス”導入法」, 『文化学園長野専門学校研究紀要』, 4: 3-17.
- 17) 内山須美子・松尾健太・奥山美希, 2013「ダンス学習の動機づけに関するテキストマイニング分析—中学生の「現代的なリズムのダンス」の授業を事例として—」, 『白鷗大学教育学部論集』, 7(1): 71-108.

